新版の出版にあたって———山本　恵子 ……1
はじめに（初版より）———酒井　紀幸 ……3

序 章　美学を学ぶにあたって ……13
1　美学とは　13
(1) 美学という言葉　13
(2) 美学の対象　16
2　日本における美学の受容　17
(1) 美学の訳語　17
(2) 日本の大学における美学講義　18
(3) 早稲田大学における美学講義　20

第 I 部
美の思想

第 1 章　**古代における美の思想** ……28
1　イオニアの自然学者と世界の原理　30
2　ピュタゴラス派と音楽　32
3　プラトンにおける美と狂気　34
4　エロースと美　36
5　詩人追放論　38
6　アリストテレスの芸術論　40
7　技術は自然を模倣する　42
8　ウィトゥルウィウスにおける建築美　44
9　プロティノス——魂の美と上昇について　46
10　アウグスティヌス——愛について　48
11　音楽と教会　50
12　ボエティウスの音楽論　52
13　偽ディオニュシオス・アレオパギテースにおける美と愛　54

第 2 章　中世・ルネサンスにおける美の思想 ……56
1　エリウゲナの「神現」　58
2　サン・ドニのシュジェにおける宝石と光　60
3　神と光　62
4　ヒルデガルトにおける神体験と美　64
5　トマス・アクィナスの美学――美は超越概念か　66
6　五感とキリスト教　68
7　ボナヴェントゥラにおける美　70
8　クザーヌスの調和的世界観　72
9　フィチーノ――神の美を求めて　74

第 3 章　近代における美の思想 ……76
1　デカルトと近代美学　78
2　イギリス経験論――感覚と観念　80
3　シャフツベリの美学――古典への回帰　82
4　バークの美意識　84
5　バウムガルテン――美学の成立　86
6　ヴィンケルマンとギリシア美術　88
7　カント――無関心性の美学　90
8　シラーによる遊戯の美学　92
9　ドイツ・ロマン主義の文学運動　94
10　ゾルガーの美学――イロニーについて　96
11　ヘーゲルの芸術終焉論　98
12　ショーペンハウアーの音楽観　100
13　フィードラーと芸術学の始まり　102

第 4 章　現代における美の思想 ……104
1　ニーチェにおける創造の芸術論　106
2　20 世紀初頭の新たな動向　108
3　クローチェにおける直観　110

4　ニコライ・ハルトマンの存在論的美学　112
5　現象学と美学　114
6　ハイデガーの芸術作品解釈　116
7　オスカー・ベッカー――美のはかなさについて　118
8　ベンヤミンの芸術論――芸術作品の複製について　120
9　ルカーチ――日常の反映としての芸術　122
10　バタイユにおける至高と美　124
11　アドルノの音楽社会学　126
12　ロラン・バルトによる「構造分析」　128
13　エーコ――作品を読み解く記号論　130
14　ダントーのアートワールド　132

第Ⅱ部
美学の広がり

第5章　世紀末と美の革新 ……136
1　死と美――映画『ベニスに死す』　136
2　ワーグナーの音楽　138
3　ルートヴィヒ2世　140
4　マーラー――音楽の革新性　142
5　ヴィスコンティ　144
6　シェーンベルクとウィトゲンシュタイン　146
7　新ウィーン楽派　148
8　十二音技法　150

第6章　アイデンティティーと美 ……152
1　プロパガンダと美――映画『意志の勝利』　152
2　フリッツ・ラング　154
3　ドイツ表現主義　156

4　ダダ　158
5　シュルレアリスム運動　160
6　退廃芸術　162

第7章　制度と美……164
1　天才と凡庸――映画『アマデウス』　164
2　「視の制度」と遠近法　166
3　資本主義と芸術　168
4　民藝運動　170
5　バウハウス　172
6　デザインと消費　174
7　環境の芸術化・芸術の環境化　176
8　ポストモダン　178

第8章　日常性の美学……180
1　虚構の日常性――映画『トゥルーマン・ショー』　180
2　化粧　182
3　感性マーケティング　184
4　カワイイと萌え　186
5　テレビゲームはアートか　188
6　食の美学は可能か　190
7　生活環境美学の系譜　192
8　商品化される自然　194

第9章　現代アートと美意識の変容……196
1　1980年代のニューヨーク――映画『バスキア』　196
2　アヴァンギャルドとキッチュ　198
3　現代アートの潮流　200
4　ポピュラー音楽　202
5　ディスタンクシオン　204

6　美か？　わいせつか？　*206*
7　スーパーフラット　*208*

ブックガイド ……*210*
人物年表 ……*214*
関連地図 ……*220*
索　引 ……*223*
著者略歴 ……*227*

凡例

1.———本書全体を、3部構成とした。まず序章において本書の概要を示したうえで、第Ⅰ部では美に関する思想を古代から近代まで歴史的に通観し、第Ⅱ部では現代における美学の広がりの例示としていくつかのテーマを取り上げた。巻末に付録として、基本的なブックガイドや掲載した主な人物の年表、関連地図などをつけた。

2.———第Ⅰ部・第Ⅱ部では、左頁にそれぞれのテーマについて解説するとともに、右頁にはキーワード（①、②…）に関連する引用文または解説、人物紹介（1、2…）、文献紹介（〜）を記した。

3.———第Ⅰ部の章扉に入れた系譜図は、それぞれの章で言及する主な人物の影響関係を描いたものである。厳密なものではなく、あくまでも概略の見取り図として理解していただきたい。丸付数字はその章の該当する項目の番号を示す。人物名の脇に美学的思考のエッセンスとして示した引用文は、該当項目に出典を掲げてある。

4.———第Ⅱ部の各章の冒頭では、それぞれの章の基調テーマを考えてもらうためのプロローグとして、関連する映画を題材に取り上げた。

5.———本書中に紹介した文献は、原則として比較的入手しやすい版を表示しており、必ずしも初刊ではない。

6.———引用にさいしては、旧字旧かなを改めた場合がある。引用した訳書にある原語を省略したり、また必要に応じて補足した場合がある。

7.———本書中の写真は、p.22を除き、すべて編著者が撮影したものである。